

平成29年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月7日実施)	総合評価(3月16日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	・自立と社会参加をめざし、キャリア教育の視点から小学部から高等部までの教育内容を見直し、系統性のある教育課程を再編成し、授業改善に取り組む。	①自立と社会参加という視点を意識して各教科の目標・学習内容の系統性を学部ごとに確認・整理を進める。 ②各学部の授業実践と校務グループが連携し、授業改善を図る。	①②各学部が、「はたらく」に結び付ける作業的な学習で支援の工夫・改善に取り組み、その成果として目標・学習内容等を系統的にまとめる。(研究研修班との協働)	①②各学部が、「はたらく」に結びつけた作業的な学習について教育研究で取り組み、学部としての目標や学習内容をキャリア教育の観点から整理することができたか。	①②各学部で「職業」や「清掃」など「はたらく」に結びつけた作業的な学習内容の整理について教育研究を通して取り組み、学部内での学習内容の系統性の検討が進められた。	①②学部を越えた学習内容系列表の作成までには至らなかったが、次年度はさらに教育研究との連携を深め、他教科の学習内容の系統性を学部内でまとめる。	①②相模原養護学校の授業における学習内容系列表の完成に向けて計画的に進めてほしい。	①②教育研究でまとめた「はたらく」に結びつけた学習内容を学部内で整理し、系統だった指導について検討が進められた。	①②各学部が教育研究を通じて整理した教科等の学習内容の系列を教務班が学部間を繋げ、学校全体の学習内容系列表の作成に取り組む。
2 (幼児・児童・) 生徒指導・支援	・児童・生徒一人ひとりの人権を尊重し、個性に応じた支援・指導を組織的に行う。	・児童・生徒一人ひとりの「いのち」と人権を尊重した支援・指導の実践に取り組む。	・児童・生徒への「さん付け呼称」のより一層の定着を図るため、学校全体での取り組みとしての周知や家庭との協働を実践する。 イ、児童・生徒がお互いを尊重しあう態度を育み、いじめやからかいをなくす方策のひとつとして、児童・生徒同士が「さん付け呼称」を実践する指導を各学部・室の重点とする。	・「さん付け呼称」が学校全体の重点的な取り組みであることについて機会を捉えて家庭へ周知し、学校と家庭が協働した実践となって児童・生徒への呼称、児童生徒同士の呼称として定着したか。	・年度当初の面談期間に児童・生徒の呼称について保護者と担任で確認を行い、共通した認識の下で「さん付け呼称」の定着に向けた取り組みを進めた。 イ、高等部では校内実習や職業の授業等限られた場面ではあるが生徒同士が「さん付け呼称」を励行している。	・「さん付け呼称」＝適切で丁寧な対応との認識の広がり。目的ではなくツールとして捉えることが大切。 イ、生徒同士の「さん付け呼称」が進路学習の一環としての捉えとされており、「児童・生徒がお互いを尊重しあう態度を育む」というねらいからのアプローチとなっていない。	(アンケート) さん付け呼称の取り組み認知 知っている：86% さん付け呼称の定着できている：93% 保 できている：87% 教 ・呼称＝人権尊重というのは安易に感じる ・教員が「さん付け呼称」を励行することにより、自然と児童・生徒同士が「さん付け呼称」できるようになった。	・担任と保護者で確認することにより、学校としての取り組みへの理解・認知が高まったと思われる。 イ、ねらいや場面が限定的ではあるが児童・生徒同士が「さん付け呼称」をする機会が増えてきた。	・「さん付け呼称」だけでなく、児童・生徒への介助方法、言葉かけ、学習への促し等における人権を尊重したかわりについても議論を進め、適切で丁寧な関わりのスタンダード作りに取り組む。 イ、児童・生徒同士の「さん付け呼称」は、教員からの呼称が強く影響を及ぼすことを鑑みて、場面で切り分けることなく行っていくことが大切。また、お互いを尊重しあう態度を育むというねらいからの指導を実践する。
3 進路指導・支援	・将来、社会で豊かに生きることをめざし、一人ひとりのニーズに応じた進路指導・支援を行う。	①進路・職業学習や生活の学習における「はたらく」に結びつける学習で児童・生徒の主体的な活動を引き出す指導の工夫・実践を行う。	①アセスメント等により児童・生徒の実態把握や作業の課題分析を行い、作業に主体的に取り組むことができるための必要な支援ツールの開発を進める。	①児童・生徒一人ひとりにあった手順書や支援ツールを開発し、自分の力で作業を進めることができる環境を整えたか。	①高等部では学部研究と連携して「職業」についてアセスメントを実施し、環境設定、支援のツール等を工夫し、授業改善に取り組んだ。	①多様な実態の生徒に対して、職業で身につけさせたい班の重点目標と個別の目標の関連を整理して授業展開することが課題である。	①今年度は研究生徒のアセスメントをとる作業を行い、実態を把握することができた。	①各学部で教育研究との関連で児童・生徒のアセスメントが進み、個に応じた支援の手立ての開発に取り組んだ。	①支援ツールが児童・生徒にとって効果のある物となっているかの検証を行う。「視覚支援がある」という単なるアリバイにならないように、精度の高い支援ツールを作り上げていくことが大切。 ②内容の工夫として、例えば

	視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月7日実施)	総合評価(3月16日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
			②児童・生徒一人ひとりに寄り添った進路指導・支援を行う。	②小学部から高等部まで保護者のニーズに応じた進路説明会や進路見学会を企画し、多くの保護者が参加しやすいように時期や規模を工夫・改善する。	②保護者の進路説明会や進路見学会への参加が促されるよう方策をたて、参加人数を増やすことができたか。	②高等部対象の進路説明会では日程を調整することで参加人数を増やすことができた。小中学部対象の進路説明会では高等部職業の授業での活動を体験する等内容の工夫を行った。	②小中学部保護者にとって、将来を見通すことができる内容の工夫や実施時期や回数工夫が必要である。	②(アンケート) 参加のしやすさ、内容良かった：50% 小 43.8% 中 33.3% 学校の今後に期待すること 進路支援の充実：20% 14項目中最多の回答	②小中学部保護者にとって、基本的な知識を得る良い機会となった。進路保護者説明会への参加の割合が高くないことへの対応が必要。	現在小中学部で学習している内容やできるようになったことが将来のどんな力に結びつくのかということを当該学部長からの説明を加えるなど内容を工夫して実施する。回数についても複数回の実施により参加しやすい体制をとる。
4	地域等との協働	・障害のある子どもがいきいきと暮らすことができるよう、家庭・地域・関係機関との連携を進める。	・「ともに生きる社会」の実現に向け、家庭・地域・関係機関との連携・協働を進める。	・地域の方が相模原養護学校へ足を運び、児童・生徒や教育内容を知っていただく機会を学校見学会や交流会等のイベントを企画することにより増やしていく。 ・地域対象の学校見学会や交流会では、各学部の児童・生徒の学習と協働した取組みを取り入れる等の工夫をする。	・地域と連携した学校見学会等を企画し、児童・生徒の学習と協働する等、地域住民が相模原養護学校への理解を進めるための方策を立てられたか。	・見守りボランティア、関係する地域の学校PTA対象の学校見学会を実施し、述べ36名参加があった。 ・地域との協働という観点では、各学部の教育活動に位置づけて実施することができた。	・これまで、相模原養護学校の教育活動に間接的ながらも関わりのあった方々を対象に学校見学会を実施したが、自治会や老人会等にも交流の範囲を増やしていけると良い。	(学校評議員の意見) 学校からはこれまでの「受身の交流」から「貢献という視点からの交流」という説明があった。障害のある児童・生徒にとって人のために行ったことをほめてもらい、それをうれしそうに感じることはとても大切。	・学校見学会等では、高等部職業班の見学を通じて本校の教育活動についての理解を深める機会となった。 ・地域との協働という観点では、地域団体との清掃活動、職業班が軍手の洗濯や高齢者施設の清掃活動を受注したりした。	・年度も継続して学校見学会を実施するとともに、民生委員等、近隣住民にも呼びかけ、多くの人に参加していただけるよう設定日の工夫や広報に努めていく。 ・地域との協働による活動については継続して実施し、学校と地域がより良い活動となるように取組みの工夫について学部と分掌が協働して計画を立てていく。
5	学校管理 学校運営	・すべての職員が、教育環境の変化や課題に機動的に対応できる学校組織作りを進める。	・教育環境の変化や学校の課題を的確に捉え、各学部・分掌間での連携を密に行って機動的解決を図る。	・高等部生徒のスクールバス乗車に向けた検討を行い、条件整備等を進める。 ・気にかかること等については、学校全体の課題として捉え、各学部・分掌間の連携により機動的な解決を図る。	・高等部生徒のスクールバス乗車を実現することができたか。	・高等部生徒のスクールバス登校便への乗車に向けての検討を進めた。 ・分教室の体力づくりでは、高校の外周ランニングコースの安全面の課題が明らかとなり改善に向けた取組みを進めた。	・高等部生徒の登下校便乗車に伴い、スクールバス運行要綱の作成が必要である。 ・ランニングコースの変更について高校側との調整や生徒の教育的ニーズにあった運動メニューの開発等が必要であり、夏季休業中に準備を進め、2学期から実施した。	・(アンケート) 高等部スクールバス乗車についてはとても助かっています。今後もみんなが利用しやすいよう取り組んでいただけると助かります。	・高等部生徒の乗車アンケートや条件整備、説明会の実施等を経て、来年度4月からの実施を実現することができた。 ・年度途中ではあったが高校との調整によりコースの変更を行い、安全な実施が確保された。	・登校便への高等部生徒の乗車は県立特別支援学校ではパイオニア的な立場であるので、全県的な視点に立った運用を心がけていく ・来年度も安心・安全な学校づくりを進める中で課題と認識したことについては、学校全体で問題解決に向けて機動的に取り組む。その際、GLが学部・分掌の連携をコーディネートする役割を担い組織的な解決を図る。